

人間学部 平成 30 年度 後期末

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、平成 30 年度後期に開講された科目の内、生による授業評価が実施された 101 科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 1（心理学科 16 科目）、および図 2（コミュニケーション学科 12 科目）にそれぞれ示した。図 1 に示された心理学科の学生の延べ人数は 425 名で、各学年それぞれ 1 年生=226 名、2 年=168 名、3 年=21 名、4 年生=10 名であった。また、図 2 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 363 名で、各学年それぞれ 1 年=165 名、2 年=198 名であった。心理学科では、2 年については昨年度とよりやや高い評価となり、1 年は昨年度と同程度であった。一方でコミュニケーション学科では、2 年生の評価昨年度と同様であったが、1 年は昨年度より少し評価が上がっていた。

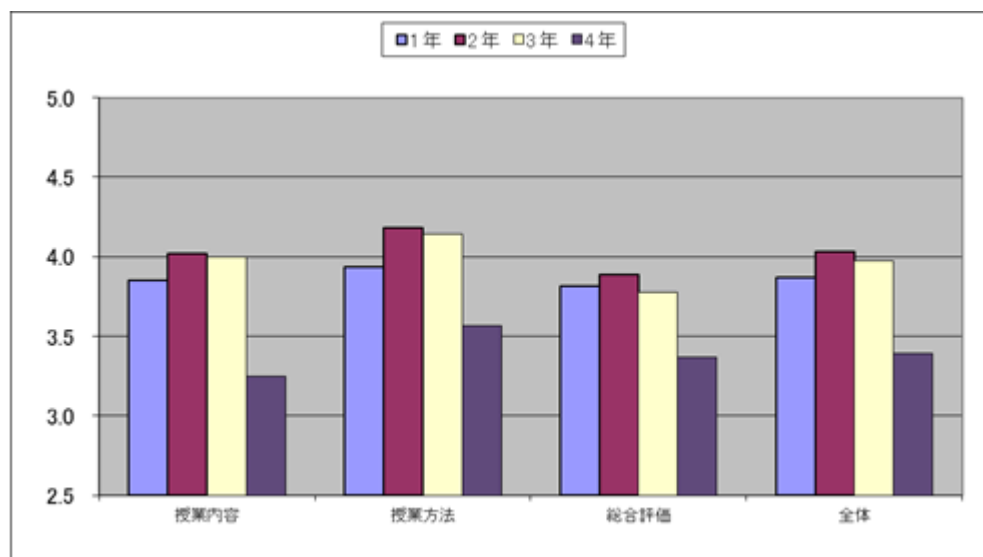


図 1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点

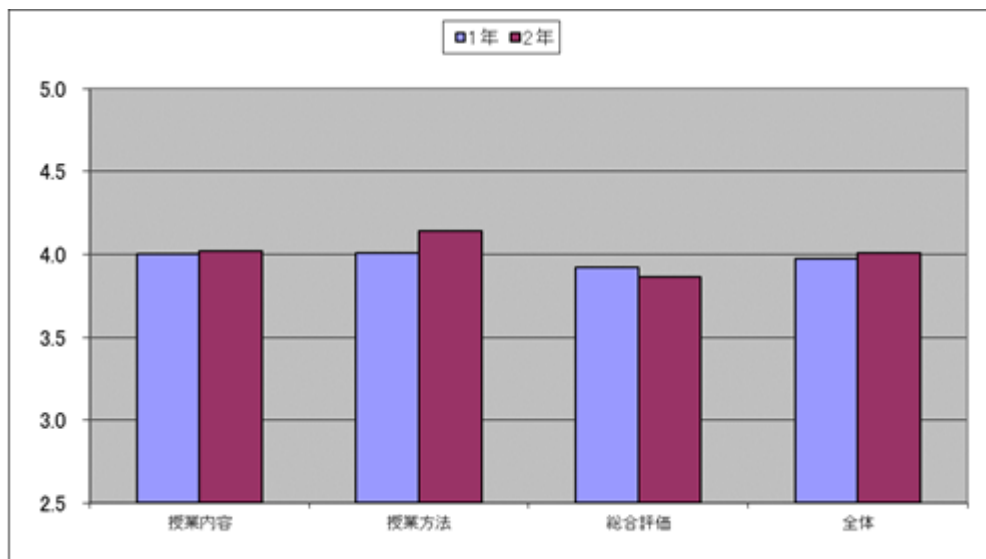


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科12科目）、および図4（コミュニケーション学科14科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は188名で、各学年それぞれ1年=112名、2年=76名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は179名で、各学年それぞれ1年=98名、2年=81名であった。

心理学科においては、1年は4点を超える高い評価であり昨年度より少し高くなっていった。2年は昨年度よりかなり高くなっており、1年を上回る高い評価となっていた。一方で、コミュニケーション学科は、1年については昨年度より若干評価が高くなっていったものの、2年については昨年度より低くなっていった。とはいえ、両学年ともすべての項目で4.0を超えており、高い評価がなされていた。

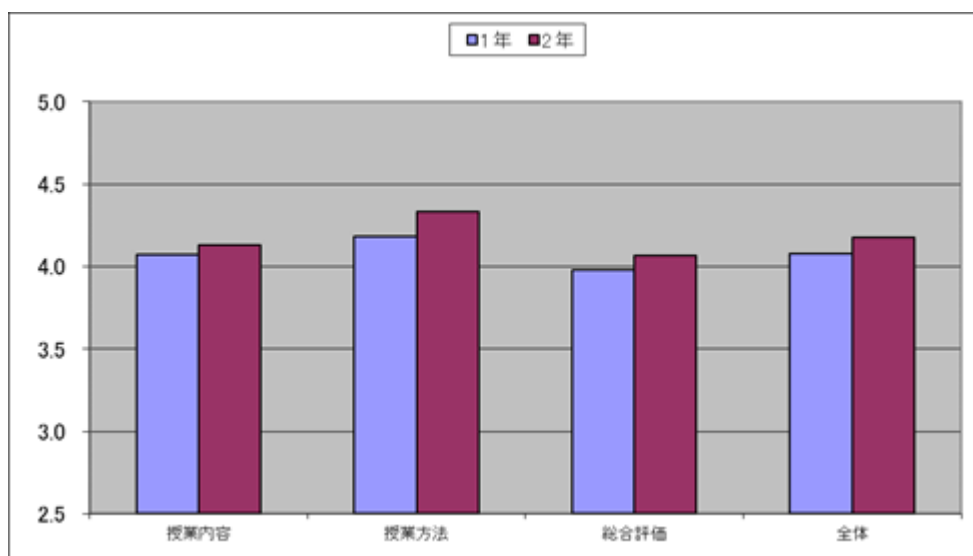


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点

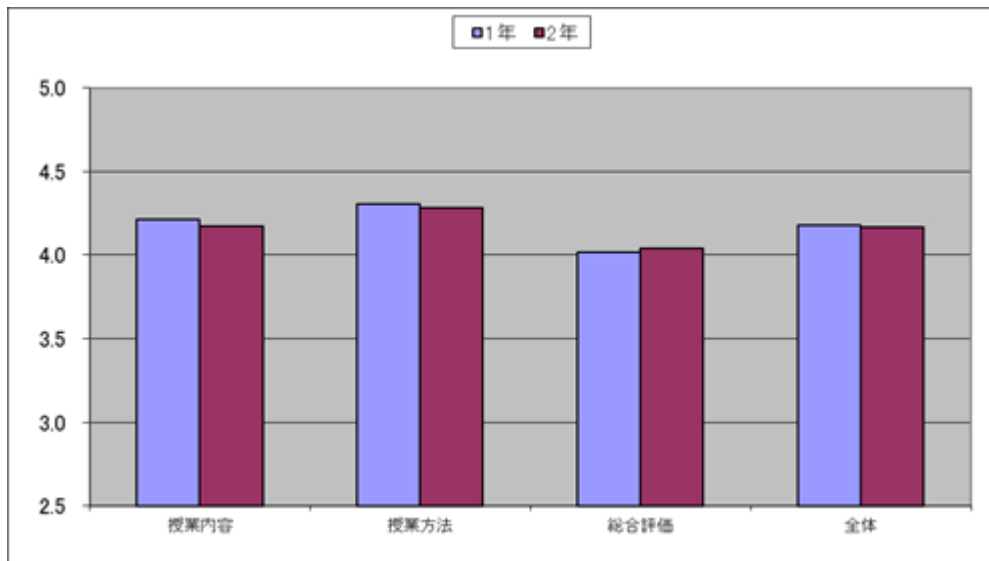


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 22 科目、コミュニケーション学科 49 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図5（心理学科）、および図6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図5に示された心理学科の学生の延べ人数は1253名で、各学年それぞれ1年=465名、2年=308名、3年=450名、4年=30名であった。また、図6に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は998名で、各学年それぞれ1年=414名、2年=334名、3年=219名、4年=31名であった。

心理学科において、1年の評価点は昨年度に比べ下がっていたが、2年は昨年度より上がっていた。しかし3年は下がっており、2年の科目については大きく改善されたといえるが、1年3年の科目については改善の必要があるだろう。コミュニケーション学科においては、昨年度に比べ1年の評価が上がり、3年は少し低くなった。また3年と4年の評価点は高く1年と2年の評価点は低い傾向が示された。

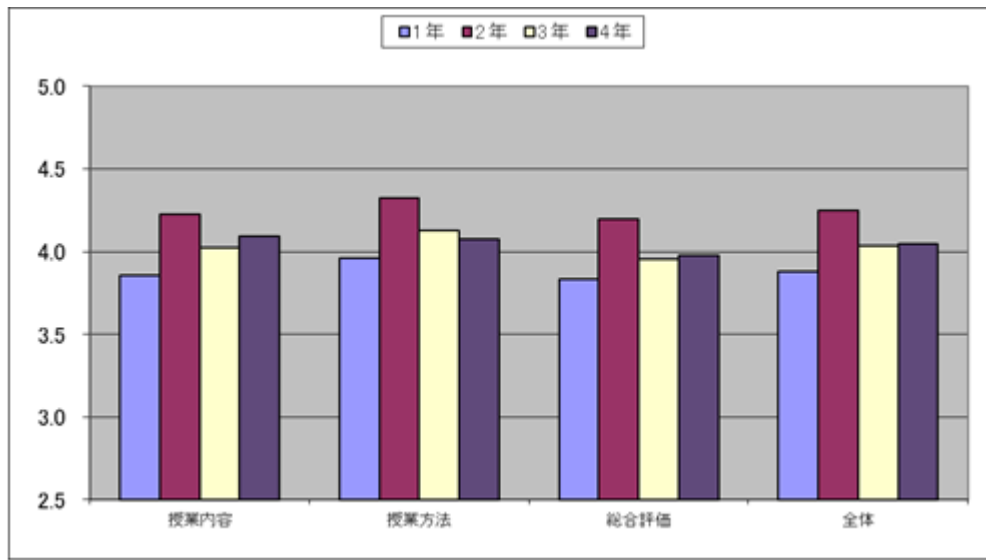


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点

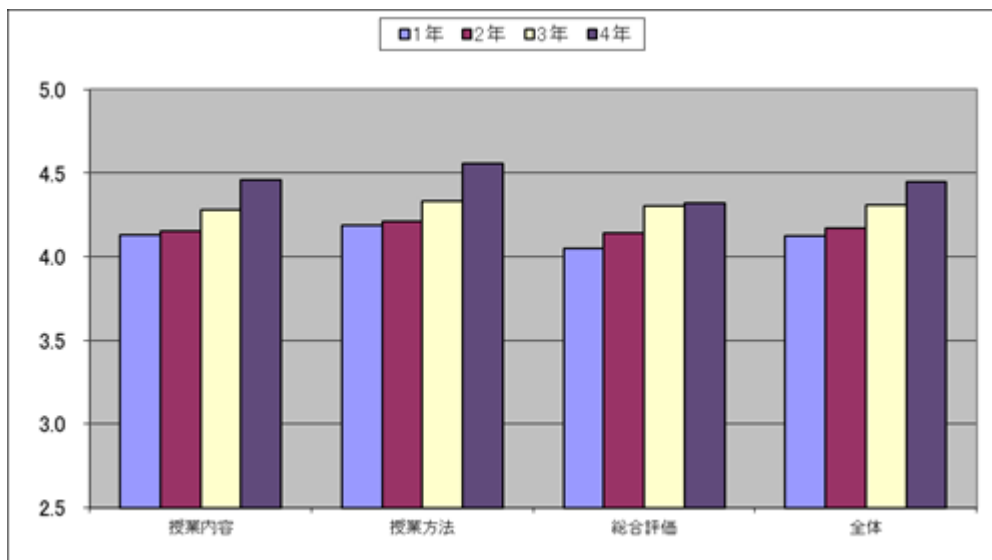


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降7節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は85科目であったが、学部共通科目16科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図7は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ11、22科目、コミュニケーション学科では、10、42科目であった。

例年、昨年度に比べ両学科とも共通科目に関する評価点が上昇し、心理学科では履修形態によ

る違いはほとんど見られなかった。一方、コミュニケーション学科では、昨年と同様、専門科目の方が高い評価が得られていると言える。

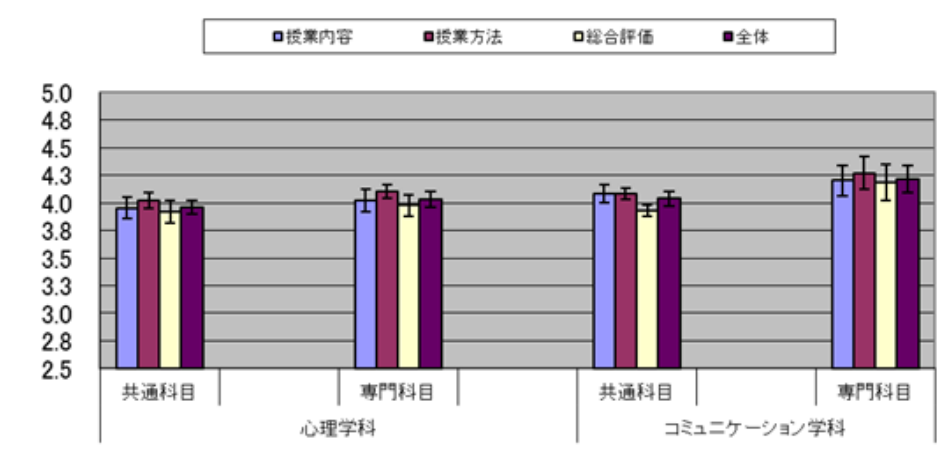


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

(5) 必修科目と選択科目の比較

図8は別の履修形態ごと(必修科目と選択科目)の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ8、25科目、コミュニケーション学科では、10、42科目であった。昨年度は両学科ともに選択科目の評価の方が高い傾向にあったが、本年度は心理学科では必修科目の評価点が上昇し、大きな違いは見られなかった。コミュニケーション学科においても、選択科目の評価点がやや高いものの、必修科目の評価点が上昇し、その差は縮まっている。

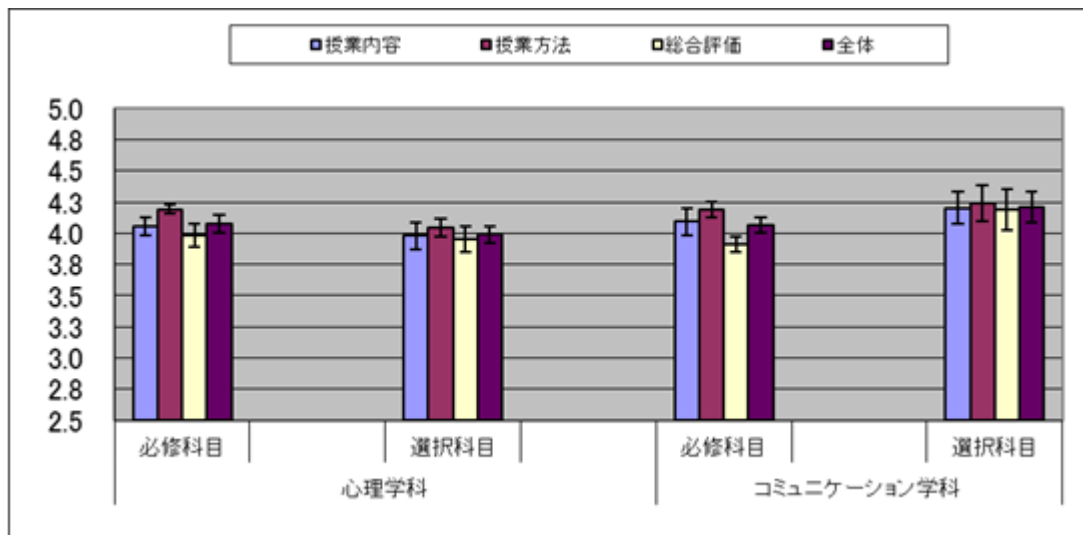


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ12科目、21科目、コミュニケーション学科では、38科目、14科目であった。

心理学科は、昨年度は40名未満より40名以上の評価点が高い傾向がみられたが、本年度は履修者数による違いはほとんど見られなかった。コミュニケーション学科では、40名以上の科目が昨年度よりも評価が高くなっており、40名未満の科目の評価点の方が少し高たかいものの、履修者数による違いはあまり見られなくなった。大人数での授業評価が上がったのは授業改善の結果が見られたものと考えられる。

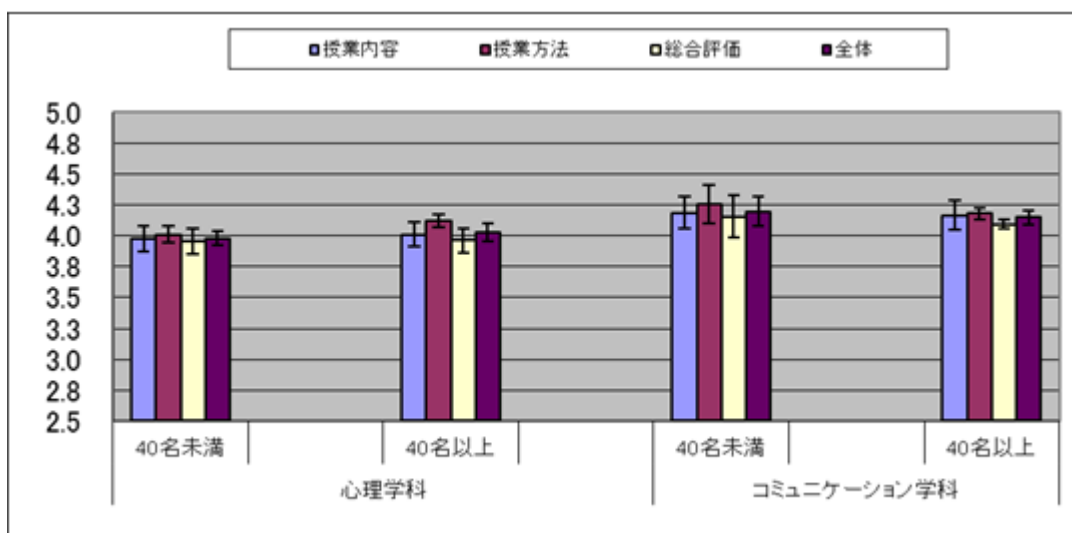


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図10（心理学科）と図11（コミュニケーション学科）である。

心理学科では昨年度同様ほとんど相関は見られず（心理学科 $r = 0.05$ 、昨年度 $r = -0.09$ ）、コミュニケーション学科においても、ほとんど相関は見られなかった（ $r = -0.09$ 、昨年度 $r = -0.35$ ）。コミュニケーション学科において、履修者数の多い授業の評価が上がったことが原因と考えられる。

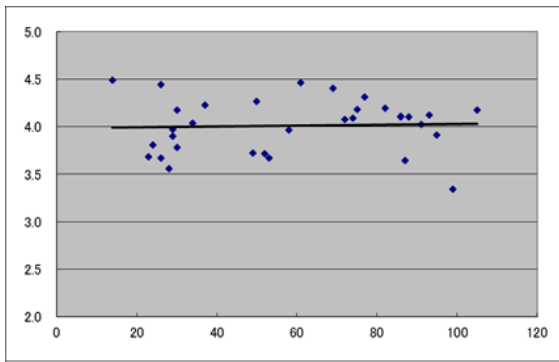


図10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = 0.09$ (n=33)

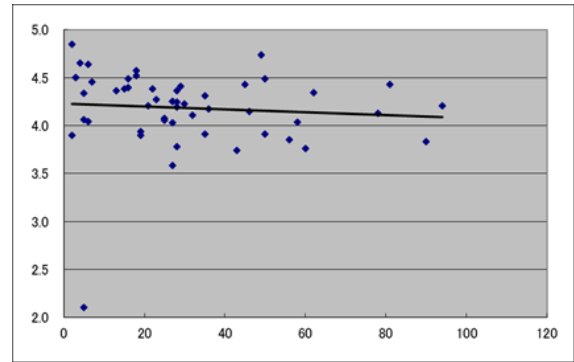


図11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.0$ (n=52)

(7) 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図12に示した。それぞれの科目数は心理学科が6、5、22科目、コミュニケーション学科が4、6、42科目であった。今年度は共通教養の回収率が両学科ともに大きく下がっており、今後回収率を上げるための改善が求められる。共通語学と専門科目については、回収率は概ね80%を上回っており、高い回収率が今年度も維持されていることが示された。

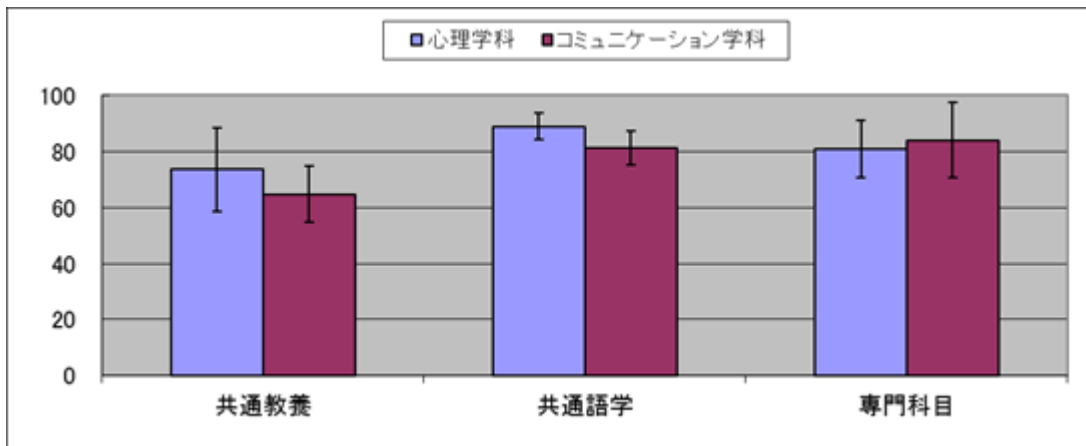


図12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

(8) 学修時間と学修行動

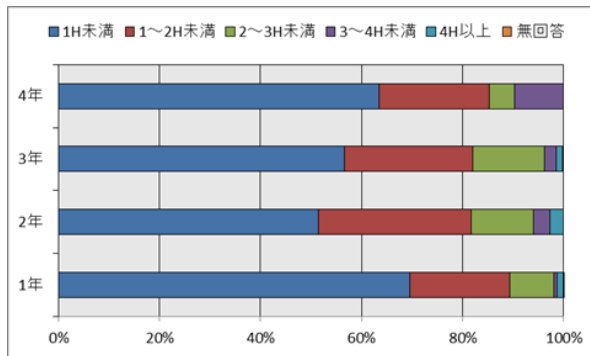


図 13 心理学科の授業外での学修時間

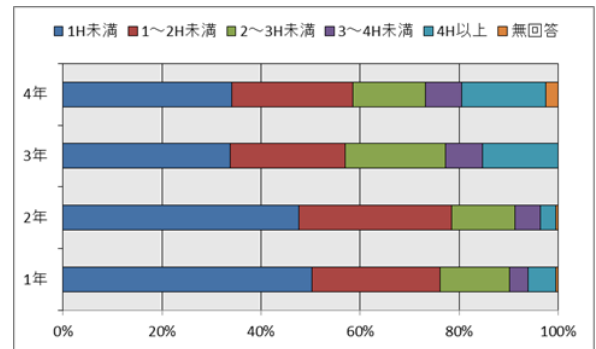


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、授業時間以外でその科目に関する学習時間が 1h 未満の学生が両学科どの学年においても大きな割合を占めており、これらの傾向は昨年と同様である。また、心理学科の学習時間は 3 年と 1 年が、コミュニケーション学科では 1 年と 2 年が昨年度より学修時間が減少しており、この原因について検討の必要がある。いずれの学科、学年においても学習時間が多いたとは言えず、今後授業外での学修時間についてどのようなことをすべきであるのか、授業内での指導やシラバスなどによる課題の指示など対策が必要であると思われる。

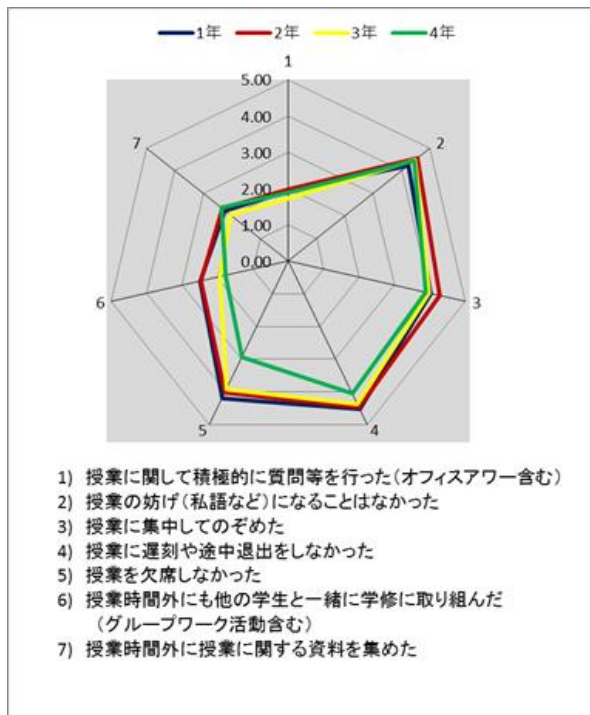


図 15 心理学科の学修行動

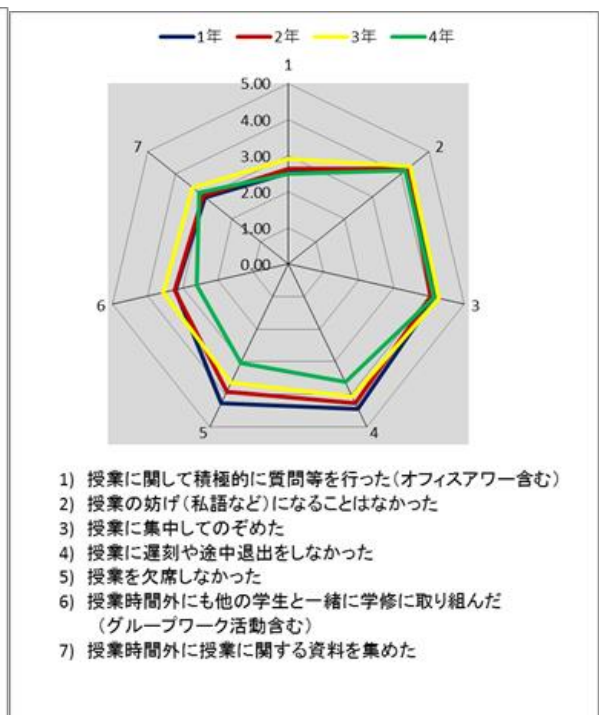


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。両学科とも、4 年生を除き、授業時間内での学修行動に関する評価は非常に高くなっており、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。また、授業に関して質問をした、授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ、授業外に授業に関する資料を集めたなど授業時間以外での学修行動（質問 1、6、7）は昨年度に続き両学科ともに低く、特に心理学科では顕著である。レポート課題の提出、グループで実施される演習など、資料を集めることやグループワーク活動などを授業時間以外で取り組むことが求められているはずであるが、行動に移されていない様子が示唆された結果となった。今後さらに課題がどのように遂行されているかの確認や授業外での学修方法についての具体的な指導、シラバスでの具体的指示といった対応が必要であると思われる。

人間生活学部 平成 30 年度 後期末

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、平成 30 年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 125 科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う 2 項目、授業及び学修に関する 18 項目（評価基準は 1～5 点）の計 20 項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計 18 項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1 項目（1h 未満、2h 未満、3h 未満、4h 未満、5h 以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 7 項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として 10 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「平成 29 年度仁愛大学 FD 推進活動報告書」を御覧ください。

(1) 共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 11 科目から回答を得た（図 1 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 248 名、2 年生が 69 名であった。

授業に対する評価は、1 年生ですべての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」で平均点数 3.7 点以上であり、2 年生ですべての項目が平均点数 4.5 点程度であった。2 年生は昨年度後期に較べ全体的に評価が著しく高くなっていた。1 年生は昨年度とほぼ変わらなかった。

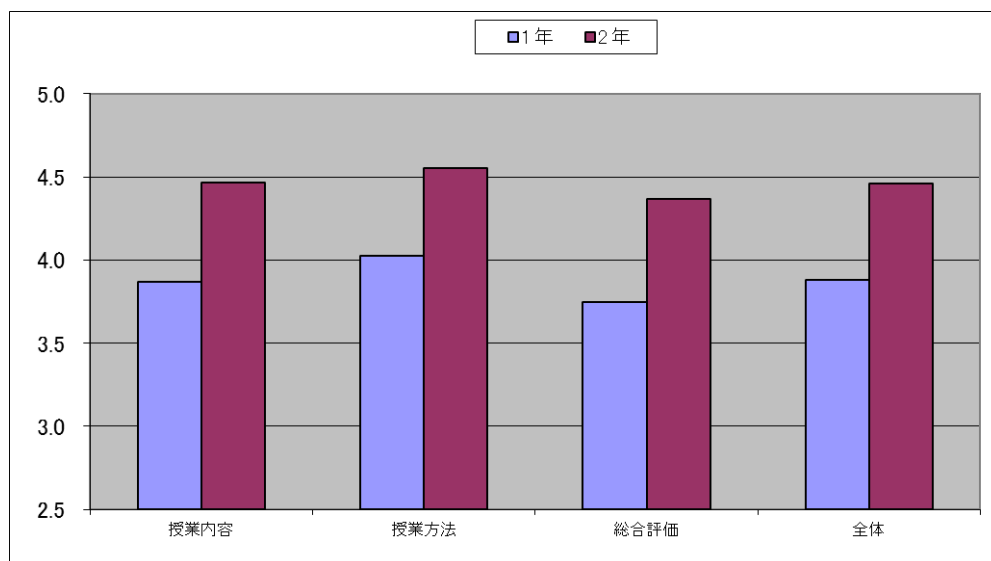


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=248名、2年=69名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において11科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が246名、2年生が69名、3年生が14名であった。

授業に対する評価は、1年生ですべての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」が平均点数3.7点以上であり、2年生ですべての項目が平均点数4.3点以上であった。昨年度後期に較べ2年生は「総合評価」がやや高くなっており、他はほぼ変わらなかった。1年生は昨年度とほぼ変わらなかった。

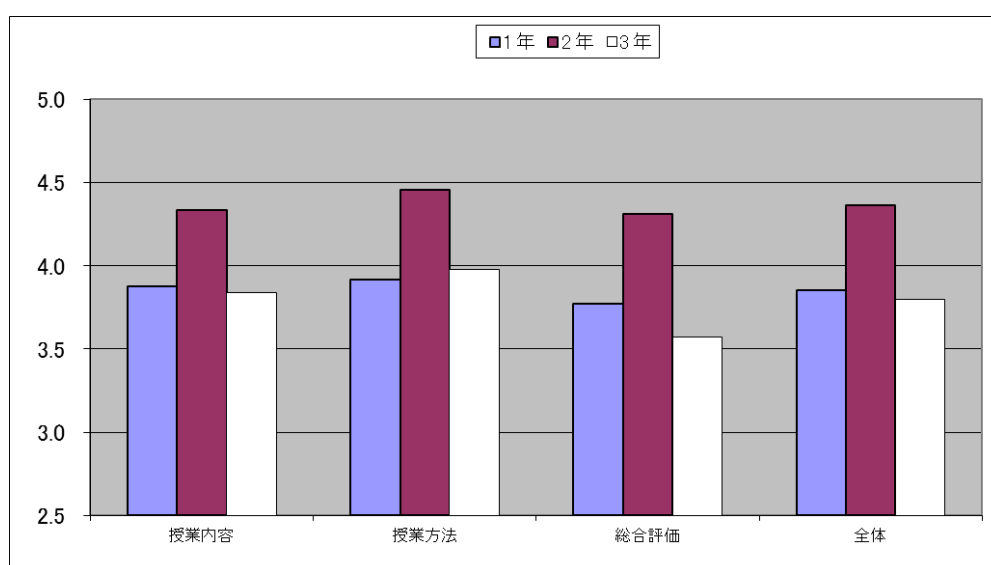


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=249名、2年=69名、3年14名

[両学科のまとめ]

本年度後期共通教養科目に対する1、2年生の評価は両学科で非常に似通っており、1年生よりも2年生での評価が高く、2年生は両学科ですべての項目の平均点数が4.3～4.5程度と高い評価であった。評価は、学年毎の学生の特徴に影響を受けている可能性はあるが、両学科で結果が一致していることから開講された科目の影響もあったと考えられる。

(2) 共通語学系科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において8科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が123名、2年生が23名であった。

授業に対する評価は、全学年で全ての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」での平均点数が4.0点以上で、2年生が全体的に高い評価であった。昨年度後期と較べると、2年生は全体的に評価が著しく高くなっていた。一方、1年生はほぼ変わらなかった。

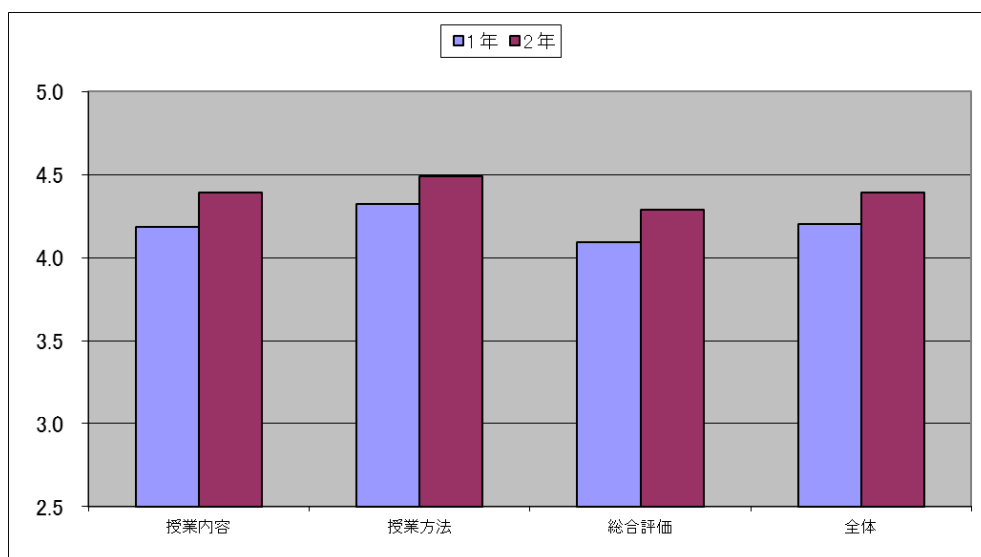


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=123名、2年=23名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において8科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が131名、2年生が13名であった。

授業に対する評価は、全学年で全ての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」での平均点数は4.0点程度で、昨年度後期と較べると、全学年で全体的に評価が低下しており、2年生で約0.5点低下していた。これは、昨年度の2年生の評価が高かったことが影響している。

[両学科のまとめ]

本年度後期共通語学科目の評価は、全体的には1、2年生共に健康栄養学科での評価が子ども教育学科での評価より高い傾向で、昨年度と逆転した形となっており、学年毎の学生の特徴に影響を受けている可能性がある。しかし、共通教養科目での評価は両学科のそれぞれ1、2年生間に大きな違いはなかったことから、子ども教育学科学生の意欲が健康栄養学科の学生よりも劣っているということではなく、授業の内容や方法等が子ども教育学科学生の望む内容に合わない部分がある等の原因があるのではないかと考えられる。

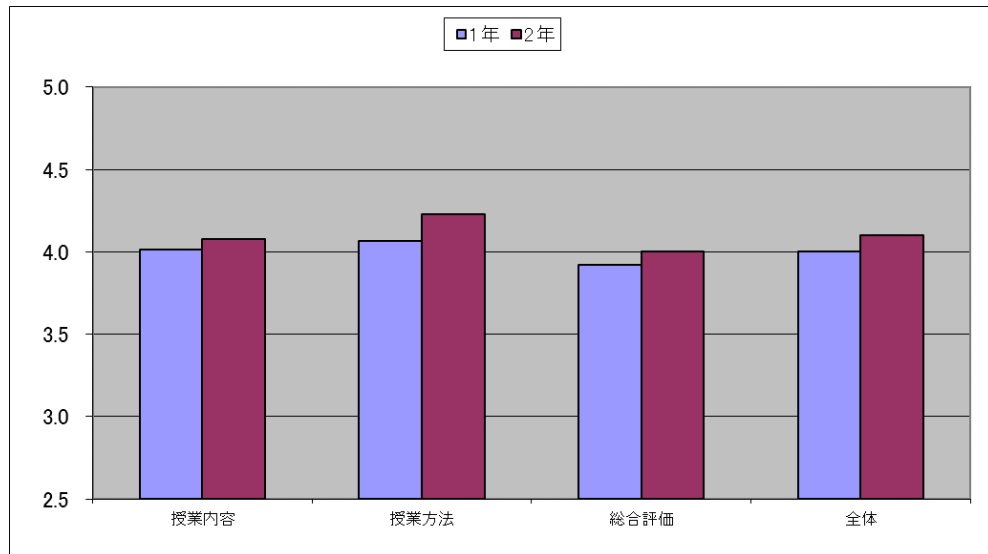


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=131名、2年=13名

(3) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において54科目から回答を得た(図5参照)。延べ回答人数は、1年生が615名、2年生が733名、3年生が330名、4年生が49名であった。いずれの設問群においても、評価平均点は、1、2年生は4.2点以上、4年生は4.0点程度、3年生が最も評価が低く3.7点程度であった。昨年度後期と較べると、全体的に1、2年生が高くなっており、特に2年生で著しく、それぞれの項目で0.3点程ずつ高くなっていた。一方、4年生は逆に0.3点程ずつ低くなっていた。3年生での評価は、全体的に昨年度と変わらなかったことから、3年後期開講科目構成の特徴と考えられた。

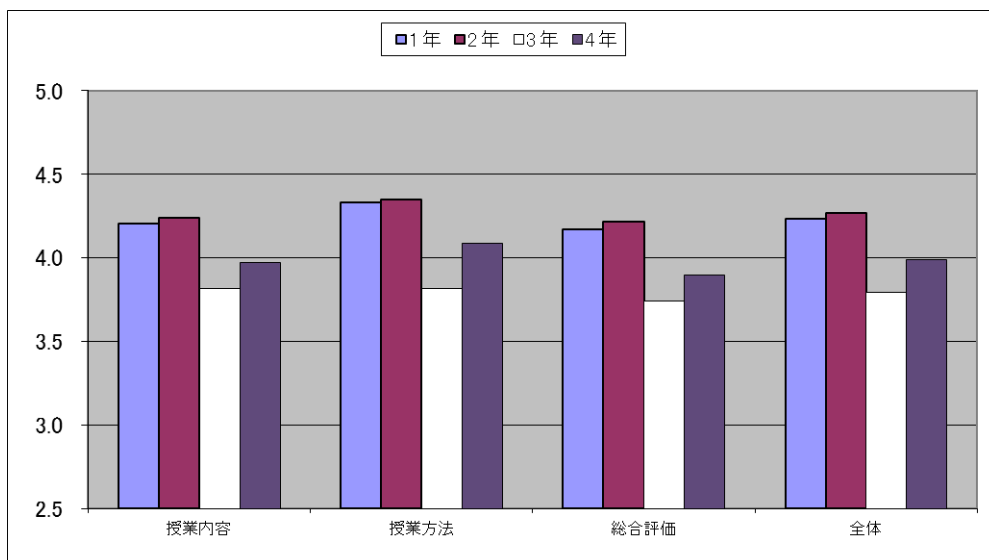


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=615名、2年=733名、3年=330名、4年=49名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、53科目から回答を得た（図6）。述べ回答人数は、1年生が585名、2年生が331名、3年生が422名、4年生58名であった。

1、2、3年生は、すべての設問群においてその評価平均点は4.0点以上で、4年生は「授業方法」以外の設問全てで4.0点を下回り、「総合評価」が最も低く3.8未満であった。昨年度後期と比較すると、1、2年生の評価平均点はほぼ変わらず、3年生は昨年度が全学年で最も低い評価だったのに対し今年度は最も高い評価となり、すべての設問群において昨年度評価より0.2~0.3点程高く、4年生は昨年度評価がすべて4.0点以上であったのが今年度は前述のとおり低くなっていた。

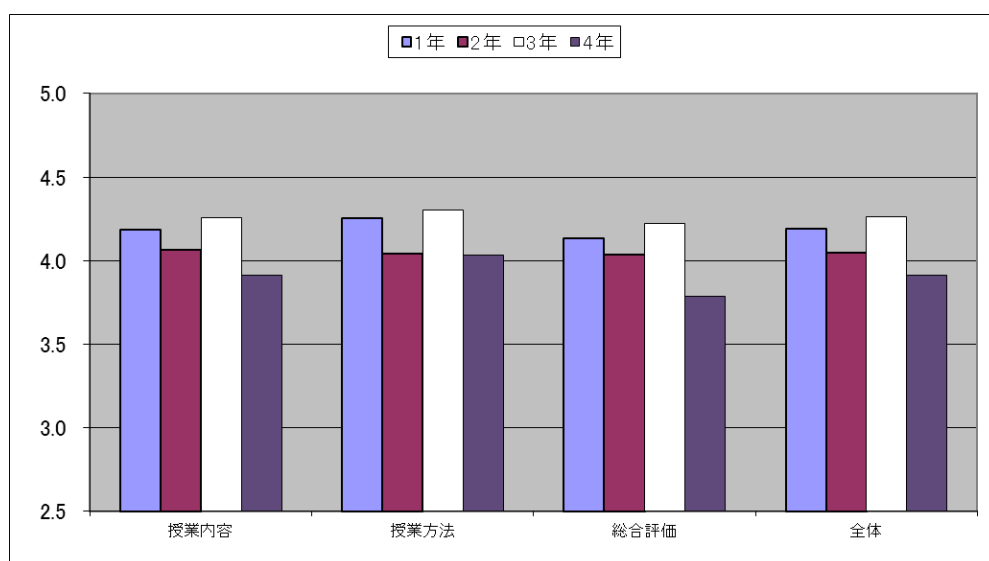


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=585名、2年=331名、3年=422名、4年=58名

(4) 科目の種類毎による比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると思われる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は112科目である。なお、学部共通科目9科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科および子ども教育学科における共通科目と専門科目の各設問群の評価平均点はすべて4.0点以上であった。昨年度後期と較べると、健康栄養学科では共通科目と専門科目の両方の評価平均点が高くなっていた。一方、子ども教育学科では評価平均点は昨年度と変わらなかった。また、両学科で共通科目のばらつきが小さいという今年度の特徴があった。

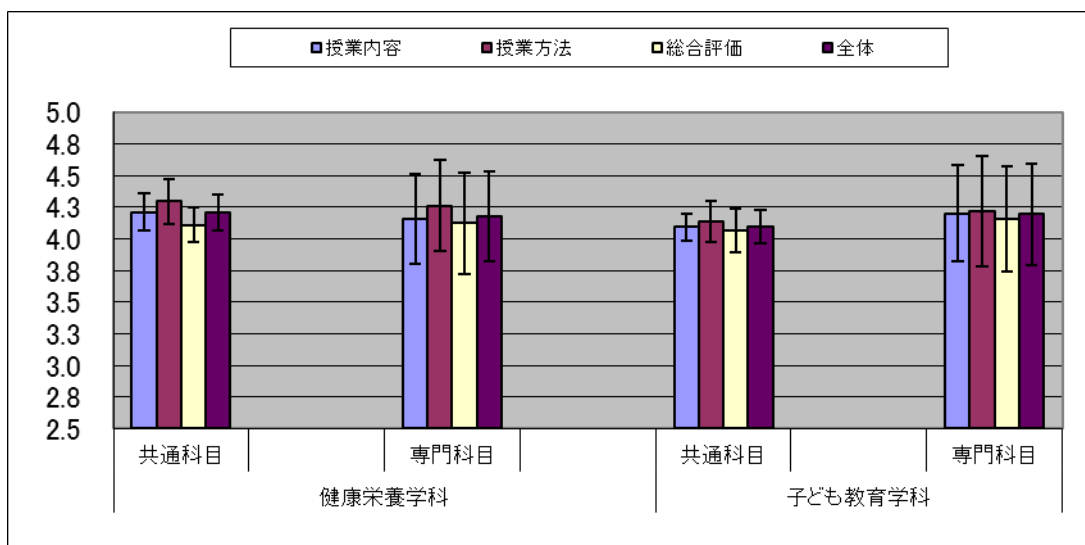


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で6、49科目、
子ども教育学科で6、51科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は112科目である。

健康栄養学科および子ども教育学科における必修科目と選択科目の各設問群の評価平均点はすべて4.0点以上であった。両学科間で必修科目と選択科目の評価平均点に大きな違いはなかった。

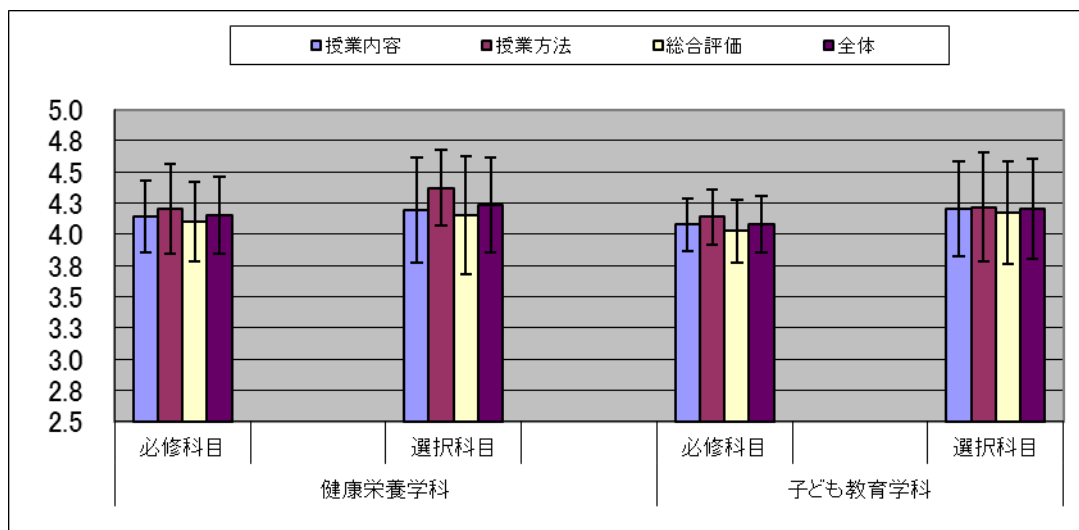


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 35、20 科目、
子ども教育学科で 8、49 科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は124科目である。

健康栄養学科で評価平均点は、40名未満で4.2点程度、40名以上で4.0点程度であった。子ども教育学科で評価平均点は、40名未満および以上のいずれにおいても4.2点前後であった。昨年度と較べると、健康栄養学科では40名未満および以上の両方における評価が高くなっていた。子ども学科においても40名以上での評価が高くなっていた。

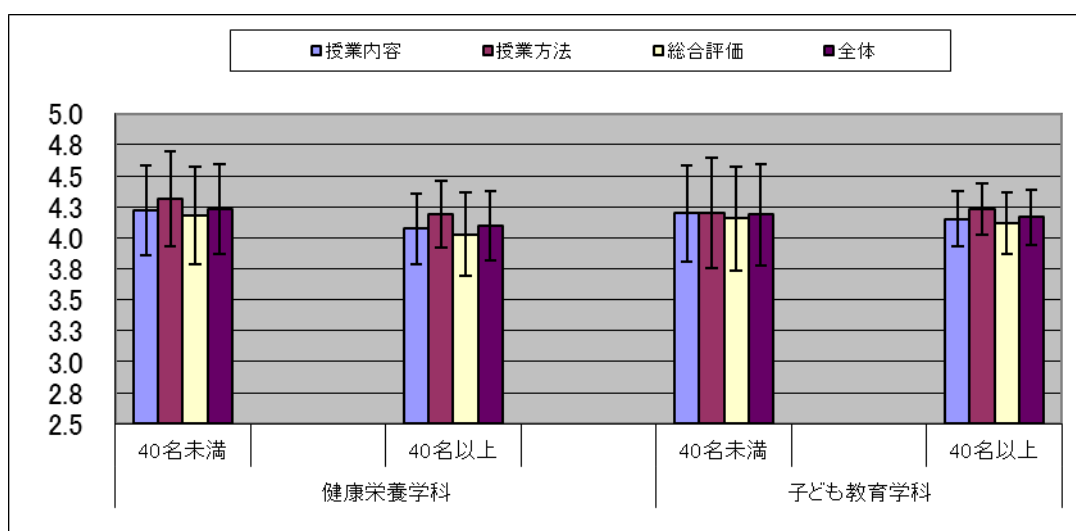


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で34、21科目、
子ども教育学科で47、10科目

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図 10 に示した。

それぞれの科目数は、健康栄養学科が 2、4、49 科目、子ども教育学科が 2、4、51 科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は両学科とも 80%を上回っていた。

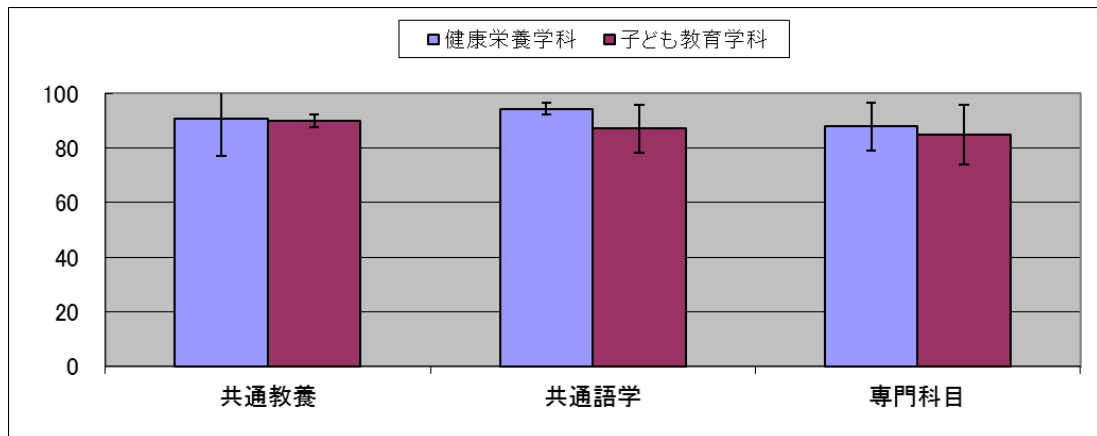


図 10 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、4、49 科目、
子ども教育学科で 2、4、51 科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図 11~13 は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。

学部全体での相関が $r=-0.22$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r=-0.14$ 、子ども教育学科は $r=-0.18$ であった。平均評価点 4.5 点以上を獲得した科目は、受講生が 40 人未満である場合が多く、20 人未満で更に多くなり、一方で、3.5 点未満の低い評価もまた 40 人未満で認められ、これらのことは両学科で共通していた。昨年度後期と較べると、両学科共に負の相関が小さくなっており受講者人数が多いことにより評価が下がるという影響がやや弱まっていた。

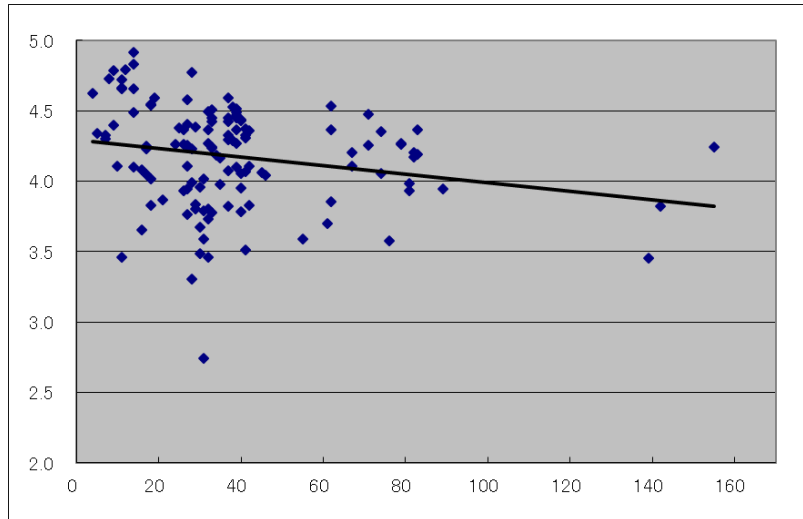


図 1 1 人間生活学部 履修者数 (横軸) と授業評価点 (縦軸) との相関
 $r = -0.22$ (n=125)

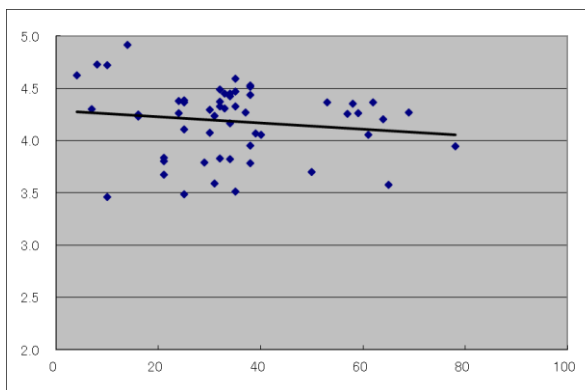


図 1 2 健康栄養学科
 $r = -0.14$ (n=55)

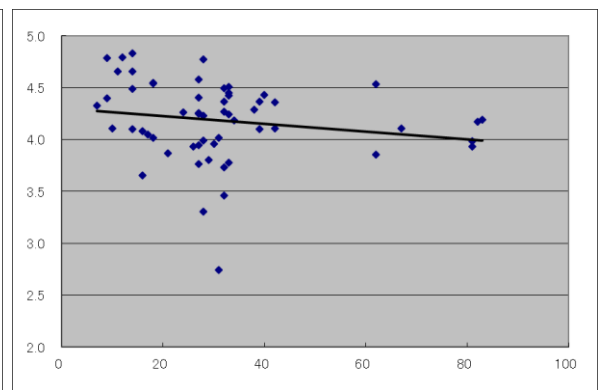


図 1 3 子ども教育学科
 $r = -0.18$ (n=57)

(5) 学外での学修時間

[健康栄養学科]

図 14 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。すべての学年において最も多かった学修時間は、1 時間未満でいずれの学年においても 50%程度を占めており、学年による大きな違いはなかった。また、昨年度の後期と較べると変化はほとんどなかった。

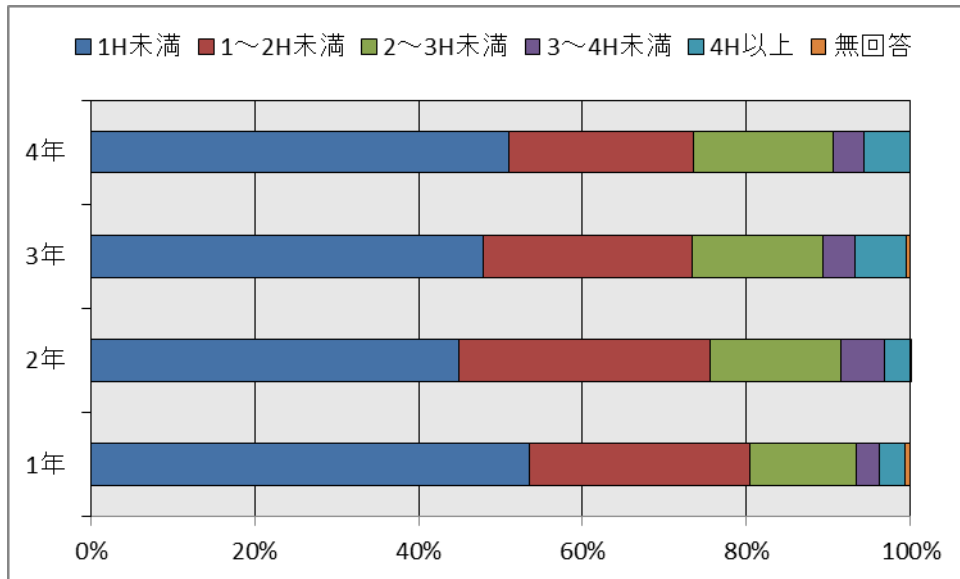


図 1 4 健康栄養学科の授業外での学修時間

[子ども教育学科]

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。1 時間未満の比率が 1 年生で最も多く 60%程度、2~4 年生では 50%程度であった。昨年度後期に較べると、1、3、4 年生の学習時間がやや短くなっていた。

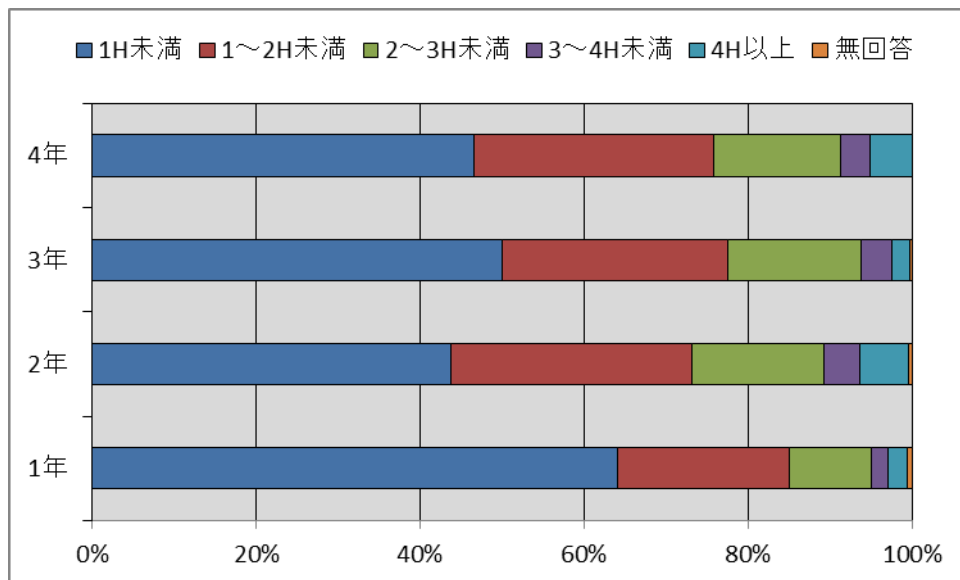


図 1 5 子ども教育学科の授業外での学修時間

(6) 学修行動について

[健康栄養学科]

図 16 は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」についての回答は、すべての学年において最も点数が低く、2 年生が 3.0 点程度、他の学年が 3.0 点未満で、4 年生が最も低く 2.0 点程度となっていた。「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」は、2 年生が最も高く両方共 3.5 点程度で、最も低かったのは 4 年生で 2.5 点程度であった。他の質問での特記事項としては、「授業を欠席しなかった」が 4 年生で 4.0 点を下回っており、就職活動等が影響したのではないかと考えられる。昨年度と較べると、4 年生を除いた学年はほぼ変わらない傾向で、4 年生は、前述した「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の項目が昨年度後期の 4 年生と較べても低い結果であった。

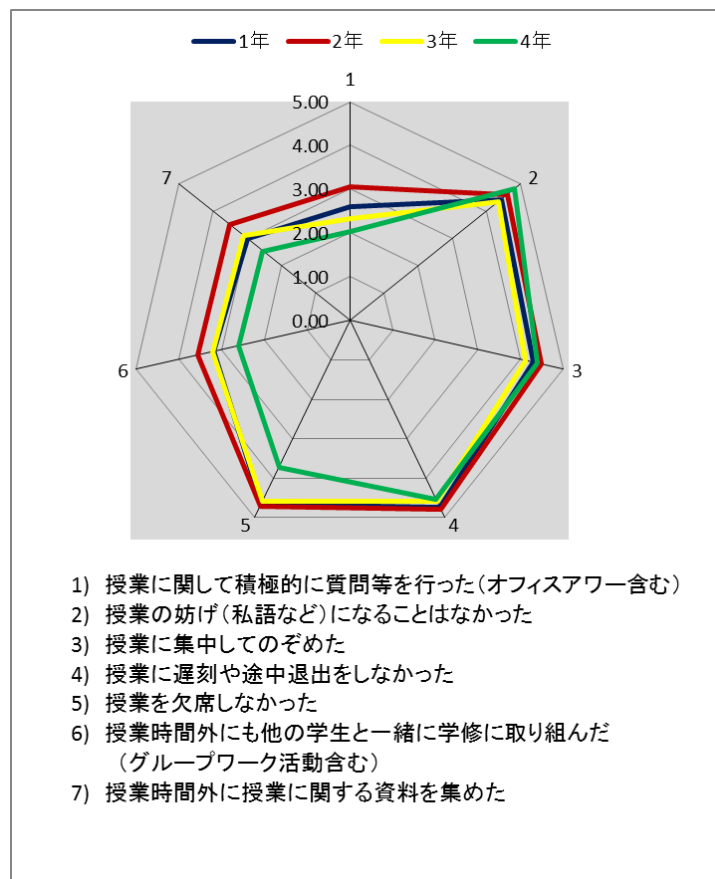


図 16 健康栄養学科の学修行動

[子ども教育学科]

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」についての回答は、すべての学年において最も点数が低く、2、3年生で3.0点程度、1、4年生で2.5点程度であった。全体的には、いずれの項目においても、各学年で同様の傾向が認められたが、「授業に遅刻や途中退出をしなかった」および「授業を欠席しなかった」が4年生でやや低い傾向があった。昨年度後期と較べてほぼ変わらない結果であった。

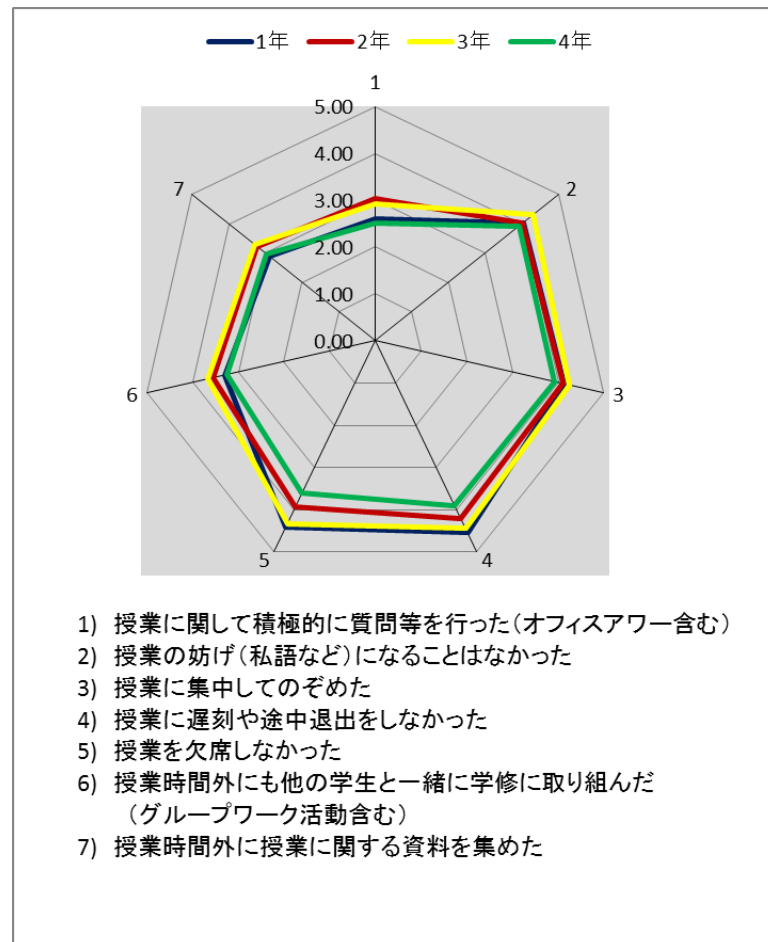


図 17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

本年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。評価は学科や学年によって異なる特徴があることが昨年度と比較することにより推察された。授業内容や方法に関しては、教員側も工夫しやすく、学生側も評価しやすいが、意欲や関心、満足度に関しては、学生個人の特性や主観および学年毎の雰囲気が影響しており、満足度だけを求め授業をするのも問題で、卒業時あるいは卒業後においてより満足度が高くなる授業をすべきであり、そのための質の見極め方も今後検討しなければならない課題と思われる。また、成績の良し悪しが評価に影響しているのかなども知り得ると良いのではないだろうか。

学修活動については、授業外の学修において、大学生に求められる学修の方法（資料収集や教員の活用等）や姿勢について、1年生のうちから意図的・具体的に伝えていく工夫が必要かもしれない。